

興福寺所蔵『春日社経蔵経論注文』

歴史研究室

本年も興福寺所蔵の古文書・典籍の調査・整理を行うとともに、『興福寺典籍文書目録』第2巻の刊行準備を行った。ここでは目録第1巻収録分の第13函2号『春日社経蔵経論注文』を紹介する。

まず本書の書誌を記すと、体裁は袋綴装、料紙は楮紙で、後補表紙と素紙原表紙がある。縦29.0cm、横23.3cm、紙数は原表紙を含め9紙である。界線はなく、一面ほぼ10行であるが、第8紙は縦紙を一紙綴じ込み、その一面に書写している。

本書は原表紙の左下に「検校（花押）」とあるが、第2紙に「于時享徳三年^{甲戌}三月十六日以古本書写之／検校少僧都尋尊（花押）」とあるので、康正元年（1455）から長祿三年（1459）まで興福寺別当であった大乘院尋尊の書写にかかることが知られる。表紙外題には「春日社経蔵経論注文」とあるが、これは冒頭の「春日御経蔵被納経論等目録」を指すもので、目録以外にその関連事項も記されている。

春日社にはいくつかの経蔵があったが、本書の経蔵は一切経蔵と称されたもので、春日本社の西方にあったらしい。その起源は第2紙裏にも一部記されているが、寛治6年（1092）7月に白河上皇が金峯山詣をした時、急病になり、春日神の咎めということで、春日社頭で毎日不退の一切経読誦を發願したことにある。翌寛治7年3月には上皇の春日社行幸があり、康和2年（1100）7月6日には一切経を書写し、その供養を社頭で行い、同15日に一切経読誦を始行している。その供料として越前国河口庄が施入された。その一切経蔵の経巻の収納状況を、文永元年（1264）10月に賢位惣蔵司が書き上げたものを尋尊が享徳3年（1454）3月に書写したのが「経論等目録」である。一切経蔵には文永元年までには一切経の他、多数の経巻が納入されていたことが知られ興味深い。春日社に成唯識論をはじめとして多数の経巻が施入されたことが種々の記録にみられるから、それらの中にはこの経蔵に納められたのもあろう。経巻以外には、供料庄園関係の重書や一切経蔵の経巻を用いる社頭法会執行に関する文書記録類も共に保管されていた。

「経論等目録」以降は尋尊が書き加えた事項である。「件検校職相伝次第」は一切経蔵と供料庄園を管轄した検校の次第が記されており、別当クラスの僧が任じられているが、尋尊は「経論等目録」の末尾にあるように享徳3年に検校職にあった。「相伝次第」の次には毎日の転読を行う一切経衆百口の記載がある。百人を5番20人ずつに編成し、1番が6日ずつ転読を行い、1か月で一巡する。百口のうちに蔵司5人がおり、うち1人が惣蔵司で、検校の代官として経蔵のことを全て奉行した。社頭転読の組織が具体的に知られる記事である。ここまでの記載は同時になされたと思われるが、本来の本書の内容と思われるが、以下の金泥唯識論書写等の記載は尋尊筆であるがやや調子を異にしており、後に付加されたのであろう。（加藤 優）

〔春日社経蔵経論注文〕

凡 例

- 1 印刷の都合上、原本の体裁を変えた部分がある。
- 2 朱書については、その書入れは『、線は……、丸は○、合点は……をもつて示した。
- 3 原本の丁替りは、新紙面の行頭に丁付及び表裏の区別を(1ウ)のよ(11)のよに標示した。

〔後補表紙〕

享徳三年

尋尊御筆
春日御経蔵経論等目録

大乘院

〔原表紙〕

〔興福寺印〕(朱印) 享徳三年^{甲戌}三月 日

春日社経蔵経論注文

検校(花押)

(1オ)

春日御経蔵被納経論等目録

朱櫃八拾五合之内五合真言經
余一切経律論等三方棚安置之

○東棚

細櫃六合、金泥唯識論六部、仁王經、不空羼索經、心經 入之

細長箱二合、唯識論、金剛般若經、春日御本地 入之

朱櫃五合被指鎌 朱櫃二合 瑜伽論

塗箱十二合、大般若經 被付封

○北棚

塗箱一合、唯識論一部、水精輪

細箱一合、金剛般若經 被付封

櫃一合、院三十講題請 被付封

檻箱一合、起請文等 入之

櫃五合、内蓮花会手箱一合 雜物等 入之

○西棚

白櫃十合、大般若經 □□三合 入之

櫃一合、最勝王經、唯識論 入之

平檻箱一合、中在塗箱、金泥唯識論 入之

朱櫃十三合、不転説真言經 此外一合 入之

○此外

櫃一合、御庄重書 被入之 但室殿御所被召之云々

平箱一合、六帖自書 入之 但為書本 助僧都被借之

塗厨子一脚 被指鎌但無鑑

朱唐櫃一合 被指鎌但無鑑

(1ウ)

塗番帳一枚 (又也)
古経衆文名等書之

前机一前

自古今着到等

已上賢位惣藏司之時見及承及分謹注進之

文永元年十月 日

干時享德三年^{戊甲}三月十六日以古本書写之

(2ウ)

檢校少僧都尋尊(花押)

○件檢校職相伝次第

○白河太上天皇御願 寛治六年於金峯山御発願 子細檢記ニアリ

康和年中件一切経被書之供料越前国

河口庄十郷^{アリ} 本庄郷 溝江郷 細呂宜郷 兵庫郷

新郷

王見郷 関郷 大口郷 荒居郷 新

庄 山荒居郷

南門之御経藏之額文ハ伊房卿筆跡也

『最初檢校 康和年中^ニ被補之』

大乘院本願法印隆禪

竜華院法務大僧正覚^信

僧正範俊 花林院權僧正永縁 中僧正玄^信 法印経尋

中僧正玄^信 權僧正隆覚 法雲院法印覚譽 修学坊僧都覚晴

權僧正隆覚 法眼定耀 僧正恵^信 法眼玄修 權僧正玄縁

權僧正範縁^玄 權僧正覚憲 權僧正範玄^信 二条法務大僧正雅縁

井山本願大僧正信^信 後井山大僧正実^信 森本大僧正円^実

(3オ)

(4ウ)

(円実ノ注ナリ)
『小童之時相伝之
井山兩代ハ彼代官也』

円実勅勘之時且被補之依常盤井相国禪門申請也
法印權大僧都実守 ○森本大僧正円^実 宝峯印大僧正尊^信

大慈三昧院大僧正慈^信 後内山大僧正尋^信 五大院大僧正覚^尊

大慈三昧院大僧正慈^信 釜口權少僧都聖^信 五大院大僧正覚^尊

己心寺大僧正孝^信 九条僧都教^尊 後己心寺法務大僧正孝^尊

後宝峯院大僧正孝^信 安位寺大僧正經^信 尋尊^尊

教尊之下ニ可有教信禪師也

一切経衆百口<sup>青花良家凡人加皆之
參社頭転読之</sup>

一番 自 一日至 六日 廿人

二番 自 七日至十二日 廿人

三番 自 十三日至十八日 廿人

四番 自 十九日至廿四日 廿人

五番 自 廿五日至 晦日 廿人

此外

准一切経 一人

輪転衆 十五人

真言経衆 五人

承仕 五人

藏司 五人 但百口之内也 此内一口惣藏司檢校代官也

供料納所

一人 但百口之内也

以上

一 永享年中前大僧正御房自御經藏大般若經一部(後出)之於

禪定院每月転読之雖不可然由申先例在之此經ハ西棚ノ

經事歟可尋之寶徳二年十月十四日禪定院炎上ノ時件經モ炎上了

(5) (ウ) (7) 墨付ナシ、第八紙ハ堅紙綴ジ込ミ)

(8)

金泥唯識論一部并心經一卷

奉為 太上法皇白川院 御息炎延命書写之天仁三年四月廿九日

一卷 正二位行權中納言兼陸奥出羽按察使藤原宗通權大納言

二卷 同

三卷 女子藤原皇嘉門院母 准三后從三位

四卷 同

五卷 一男正四位下行左近衛中將藤原信通參議從三位

六卷 二男正五位下侍從兼備中守藤原伊通九条太政大臣正二位

七卷 四男從五位上侍從藤原成通侍從大納言正二位

八卷 五男童左中將季道敷

九卷 童

十卷 從五位上少納言藤原定通大納言正二位 大宮也高倉

奉為 聖朝安穩鳥羽院 般若心經一卷

以上一供

文正三年十一月 日修複之 一切經論檢校前大僧正尋(尋) □

(9オ)

注記題

廻請

永久二年正月廿七日覺信

天養二年

同 三年三月廿日同

保延五年同三年

元永二年三月廿日同

永治二年

保安三年三月廿日水綠

久安三年同六年

同 五年三月廿日同

天治二年

大治三年三月廿日玄覺

大治三年

此外三卷不見時代也

保安三年同五年

合九卷

合九卷

合十八卷院三十講方

(9ウ)

(墨付ナシ)